

『古代アメリカ』 5,2002,pp.1-22

＜研究ノート＞

伝播か在地発展か －1980年代以降の中央アメリカ南部考古学の動向－

長谷川悦夫
(埼玉大学非常勤講師)

【キーワード】

中央アメリカ南部、伝播論、在地発展論、土器製作、トウモロコシ農耕

Lower Central America, Diffusion, Local Evolution, Pottery production, Maize agriculture

1. 中央アメリカ南部とは

先スペイン期のアメリカで、国家段階にたつした諸文明がさかえた舞台としては、メソアメリカと中央アンデスというふたつの文化領域があった。これらふたつの文化領域にはさまれた地域は中間領域とよばれる。本稿でとりあげる中央アメリカ南部(Lower Central America)は、おおざっぱにいえば、この中間領域の中米地峡部分とすることもできる。

ジョンソンは文化領域としての中央アメリカ (Central America) を「ホンデュラス西部国境を北限とし、コロンビアのアトラト谷からサンファン河谷を南限とする」 [Johnson 1948: 43] と定義している。近年ではレンジとストーンが、1980年におこなわれたSARの中央アメリカ南部の考古学についてのセミナーの成果をまとめた論集の冒頭で中央アメリカ南部の地理的区分をしめす地図 [Lange and Stone 1984: fig. 1.1] を提示している(図1)。この線引きの根拠についてはなにもべてられてはいないが、マヤ文明圏よりも以南ではじまりコロンビアの北東部までをふくんでおり、チプチャ系の言語の分布とおもわれる¹⁾。

中央アメリカ南部をふくむ中間領域は、アメリカ大陸全体のなかでも、土器がつくられはじめたのがもっともはやいという点で注目されてきた。また農業生産がはじまった時期もはやい。紀元前3-2千年紀には、中間領域はアメリカ大陸全体の先進地域であった。ところが、その後の歴史をみると、かつての先進地域であった中間領域はその周縁地域であった北のメソアメリカと南の中央アンデスの発展に追いついてしまう。スペイン人の到来時には、メソアメリカにはアステカが、中央アンデスにはインカがさかえていたが、中間領域には国家段階にたつした社会はみられなかった。「…農業の歴史だけでは、なぜどのようにしてより複雑なレベル—首長国、そしてとくに國家—が進化したかという問題にかんしては部分的な答えをだせるにすぎないであろう。…なぜ中間領域に国家がなかったのか」[サンダース、マリーノ 1972: 54]。かつてはこのような疑問が新大陸先史学の

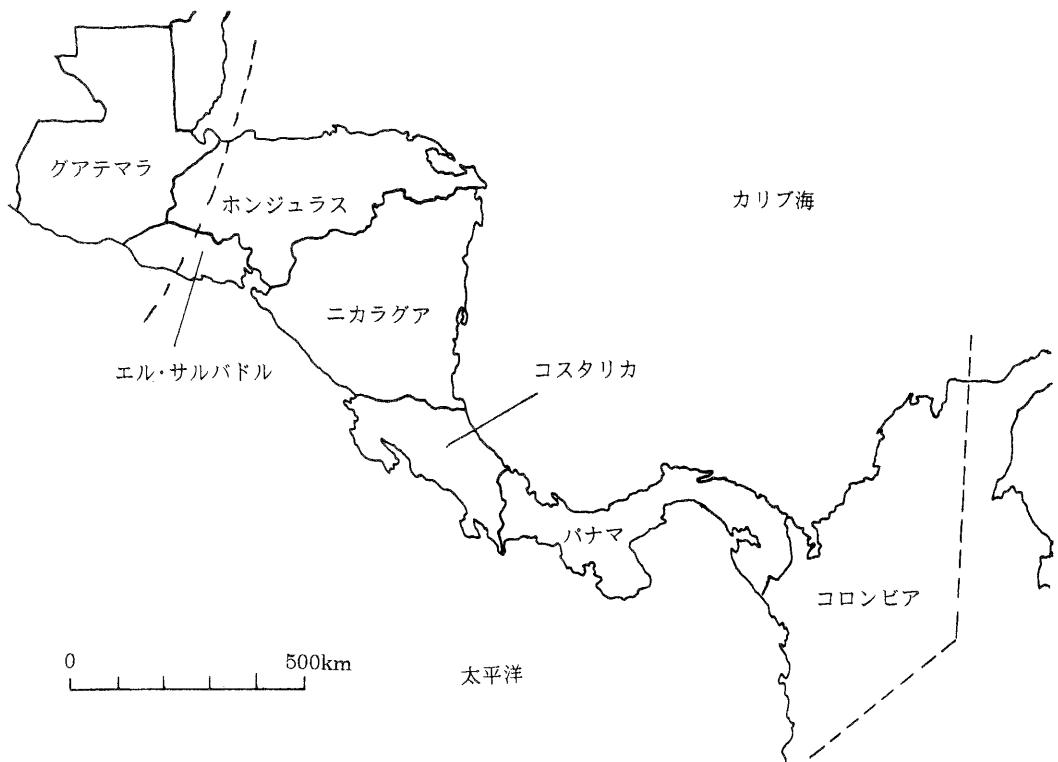


図1 中央アメリカ南部の地理的区分 (Lange and Stone 1984 Fig.1.1 より作成)

ひとつのおおきなテーマとしてとりあげられていた。

本稿では、1980年代以前の研究史を概観したのち、それ以降の中央アメリカ南部における発掘調査の成果として、「ニカラグア、コスタリカにおける形成期の土器の発見」と「パナマ中部の農耕集落遺跡の調査」をとりあげて紹介する。これらふたつの調査をとりあげた理由は、土器(あるいは彩色土器)の製作開始、農耕定住社会の発生、階層社会の成立という一連の社会変化が中央アメリカ南部ではどのようにおこったとかんがえられているかをみるために適当とおもわれるからである。そのうえで、これらの調査をおこなった研究者たちの論説をとおして、近年の中央アメリカ南部の考古学のひとつの傾向について言及し、そこにひそむ問題点を指摘する。

2. 1980年以前の中央アメリカ南部の考古学

1980年以前の中央アメリカ南部の考古学研究の集大成としては、ストーンとボーデの概説書がある。これらの著書に端的にあらわれているとおり、当時は中央アメリカ南部社会の先コロンブス期の文化変化の過程におけるメソアメリカと南アメリカからの「影響」が重視されていた。ストーン[Stone 1972]は、南アメリカ文化をその基層にもつ中央アメリカ南部、とくに太平洋岸の地域が、時を経るにしたがい北方との交流をふかめ「メソアメリカナイズ」されていったという。ボーデは、言語学とエスノヒストリーから、中央アメリカ南部をメソアメリカ伝統地域(メソアメリカと中央アメ

リカ南部の重複部分、注1参照)と南アメリカ伝統地域(それ以南の部分)とに分類し、前者はオルメカ時代からメソアメリカ化が進行しており、後者では各地に多様な文化はみられるものの、地域全体をとおしての共通点もおおく、土器についていえばコロンビアとエクアドルの影響が顕著であるとのべる [Baudez 1970:219-220]。また、レイスラップは、南アメリカ北東部のマニオク農耕民の拡散が中央アメリカ南部(および中間領域)のみならずメソアメリカ、中央アンデスへもおよんだとし、これら広大な地域の先コロンブス期文化は単一の伝統から派生したものであると主張した[Lathrap 1977]。この核アメリカ(メソアメリカと中央アンデス)と中間領域の形成期諸文化の起源という問題について、コウはかつてそれらが均質な基盤を有しており、それは大部分グアテマラ太平洋岸から南への直接的・間接的伝播の結果であるとしている [Coe 1960]。

ひとことでいえば、この時代には、中央アメリカ南部(および中間領域)の社会発展・文化変化にたいして伝播論的な説明が主流であったということである。もうひとつは、中央アメリカ南部全体を、ときには下位分類をもうけながらも、ひとつのものとしてあつかい、メソアメリカや南アメリカとの交流を重視するという巨視的なみかたをとっていたということである。

1978年、ハバーランドは中央アメリカ南部の各地の調査者によってつくられた土器編年を集成了した [Haberland 1978]。ハバーランドは、各地でつくられた編年にC14年代の補正による修正をくわえ、彼自身の手による中央アメリカ南部全体の編年網を提示している。そのさいには、搬入品であることがあきらかな土器以外の遺物によるクロスデータイングや汎地域的なひろがりをもつ土器様式の年代についての整合性も検討し、自身の編年網が現状(当時の)では妥当なものと結論づけている。

筆者の知るかぎり、中央アメリカ南部をひとつの全体としてみるマクロな視点をもち、北と南の高文明地帯からの影響の痕跡を追求した研究は、ハバーランドが最後である。

3. 1980年のSARセミナー

1980年4月にサンタ・フェでSARのセミナーが開催された。このセミナーの目的は、孤立して調査・研究をおこないがちな各地の研究者が一堂に会して意見交換をおこない、中央アメリカ南部の先コロンブス期の歴史についての全体的な見通しをつけることにあった。しかし、実際のところは、全体的な見通しをつけるというよりも、調査地域間での差異が強調される結果となり、ハバーランドがおこなったような、地域編年をつなげて中央アメリカ南部全体の編年網を整備するという方向にはむかわなかった。このセミナーの成果をまとめた論集が4年後に出版されている。論集の冒頭ではストーンとレンジは次のように述べている。

「…中央アメリカ南部のおおくの地方社会は、北と南の高文明地帯と接触し交流をもっていた。しかし、中央アメリカ南部における文化発展と多様な展開は、外部からの影響に左右されていたのではないし、外部の勢力がこの地域を支配したこともなかった。中央アメリカ南部には独自の文化的パターンが存在していたのである。…われわれはだんだんと物質文化の幅ひろい多様性に目をひらきつつある。いくつかの土器様式にはおおまかな類似があるものの、中央アメリカ南部には過剰なまでのさまざまな土器型式が存在している。」[Lange and Stone 1984: 5-6]。

これ以降、中央アメリカ南部の地域の先スペイン期の諸社会は「比較的孤立して、それぞれの置かれた環境に適応し、独自の多様性ある文化を築いた」とする在地発展論者の論調が主流となる。1978

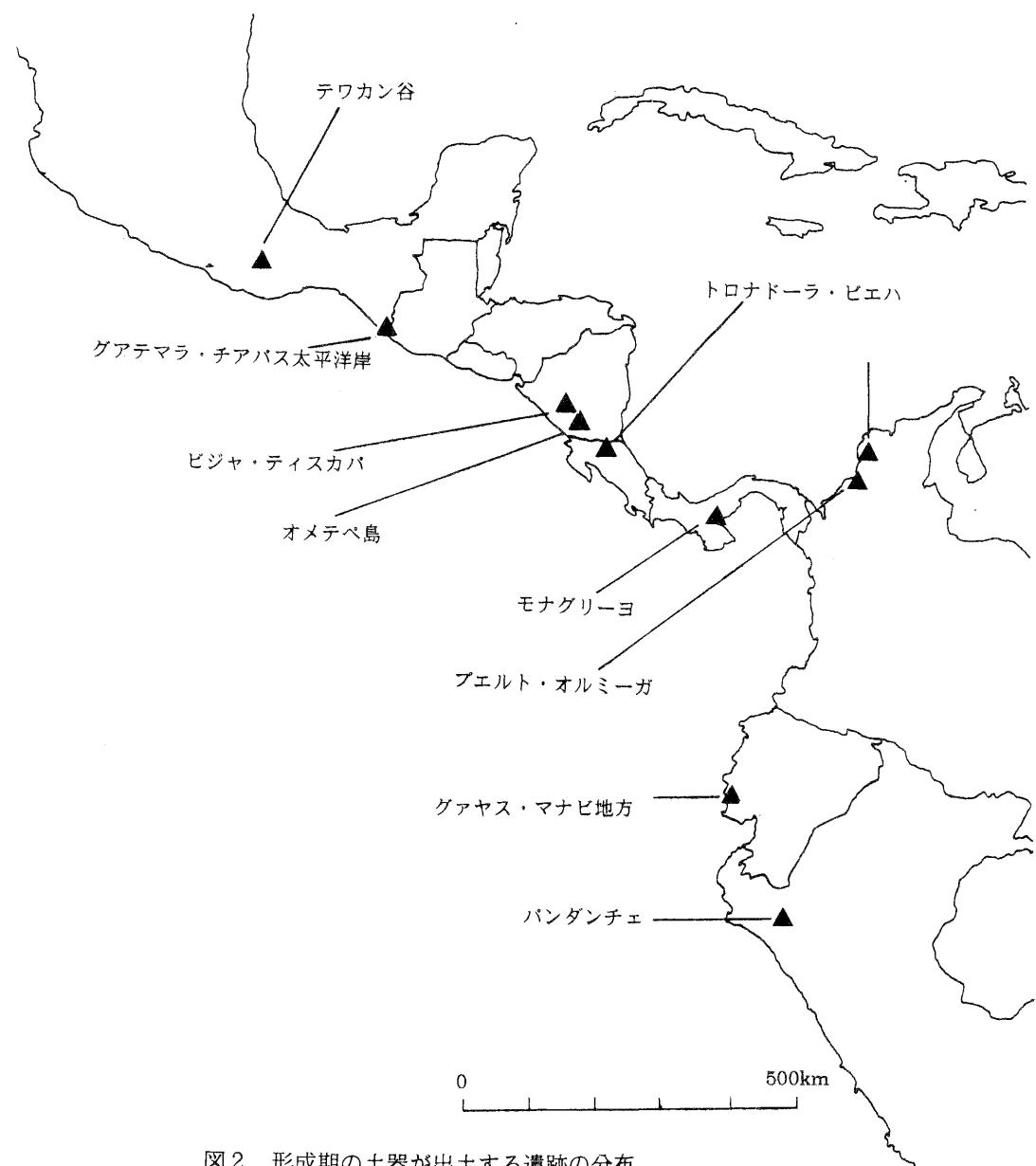


図2 形成期の土器が出土する遺跡の分布

年まで、ハバーランドが追いもとめていた方向とは逆のほうに振り子がふれだした。

4. 1980年代以降の調査成果：コスタリカとニカラグアにおける形成期の土器の発見

(1) トロナドーラ・ビエハ遺跡の土器

1984-85年にコスタリカ北西部の山中、アレナル湖畔のトロナドーラ・ビエハ遺跡(図2、以下この章でとりあげる遺跡の位置はこの図を参照)でおこなわれた発掘調査では、この遺跡に3500BCにさかのぼる人間居住の痕跡が確認された(発掘の概要と遺構・遺物の出土状況についてはBradley 1994、土器の記述と年代についてはHoopes 1994を参照)。この居住の最古段階はフォルトゥーナ期とされた。フォルトゥーナ期では2つの炉と2ヵ所の石器製作跡が確認されており、3000BCまではこの無土器段階がつづくことが確実である。これにつづくトロナドーラ前期には、合計7つの掘建て柱式の建物が確認されており、土器をともなっている。この時期のはじまりにあたる年代とされるC14年代測定値としては、2460-1890BCと1970-1694BCがえられている。このことからトロナドーラ前期の開始時期は2000BCと設定された。ただし、フォルトゥーナ期とトロナドーラ前期の層位がはっきりとわけられないために、3000-2000BCのあいだのある時点までトロナドーラ前期の開始(土器の出現)がさかのぼる可能性もあるという。トロナドーラ前期から後期への移行の年代は1000BCとされている。

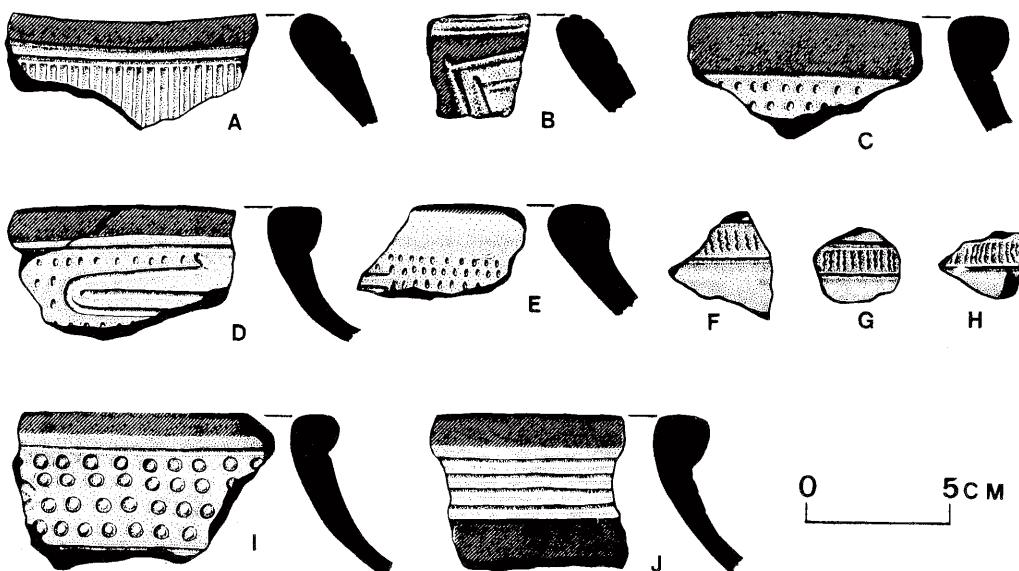


図3 トロナドーラ土器 (Hoopes 1994 Figs.10-4, 10-6, 10-8)

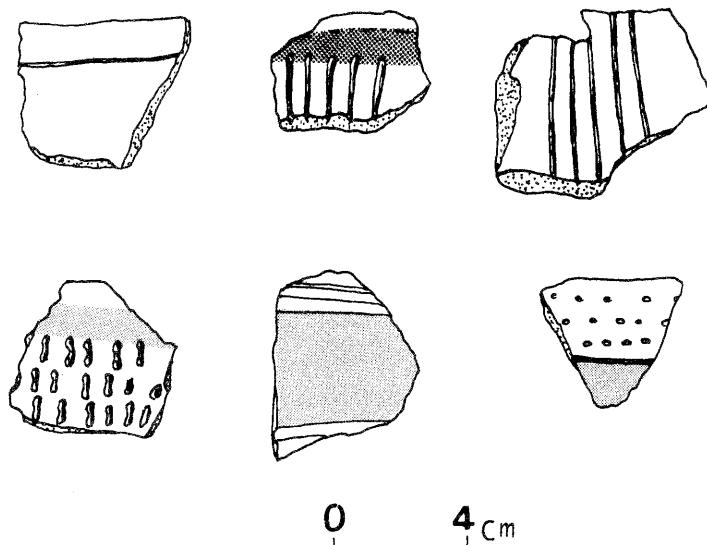


図4 ラ・ピニヤタ土器

フープスによると、この時期の土器の特徴は以下のとおりである。

1. 器形：口縁が内湾する形のテコマテとよばれるものがおおい。大型の無頸壺と小型の碗がある。その他はみじかくてふとい頸のついた壺、胴部がくびれた(双曲面形)の円筒土器がある。
2. 装飾：丸鑿で彫ったような幅のひろい浅い刻線がしばしば装飾帶の外郭線としてほどこされる(図3-A, B)。丸と斜線状の刺突文(図3-C, D, E)、貝殻による圧痕(図3-F, G, H)、赤色のアップリケをつけたものなどもある。この他にも、管状刺突文(図3-I)、平行刻線文(図3-J)がある。

テコマテ形の土器の形態、掘建て柱式の建物は、この時期にメソアメリカでみられる初期の定住・半定住村落(バラ、カントゥート、ベリーズ海岸部)と共に通性をもつ。打製、磨製の石器は堀具とかんがえられ、この遺跡で出土しているトウモロコシの植物化石とともに、狩猟採集から農耕への移行を物語っている。

(2)ビジャ・ティスカパ遺跡の土器

トロナドーラ・ビエハの発掘から10年後の1995年、ニカラグアの首都マナグア市のビジャ・ティスカパ遺跡における試掘で、最下層から63点の土器片が出土した。ティスカパ土器(23点)とラ・ピニヤタ土器(40点)の2群にわけられている²⁾。調査者のエスピノサの報告を引用すると、これらの土器にはつぎのような特徴がみられる [Espinoza 1995: 19-22]。

ティスカパ土器の胎土は良質であるが、器形は不明である。器壁は内外面ともに表面は磨いてあり、幅広の刻線が赤色帯を区画している。

ラ・ピニヤタ土器(図4)にかんしては以下のとおりである。

1. 器形：テコマテ形の壺、口縁がまっすぐにたちあがる碗とおもわれるもの。
2. 装飾：口縁の下に三列の刺突文が平行にあるもの、やはり三列の平行な貝殻による圧痕をもつものの、平行な刻線で赤色帯が区画されるもの、垂直な浅い幅広の平行刻線をもつもの、口縁に赤色帯

を施したものなどがある。

C14年代測定のためのサンプルはえられなかつたため、これらの土器の年代は他地域で年代がわかっているものと比較して推定されている。エスピノサによると、ティスカバ土器は他のどの地域でも類例がないという。ラ・ピニヤタ土器は上述のトロナドーラ土器(本稿ではトロナドーラ・ビエハ遺跡のトロナドーラ前期の土器という意味でもちいる: 2000-1000BC)と装飾技法が類似しているために同時期とみなされた。ラ・ピニヤタ土器サンプルはいずれもちいさな破片であり、もっともおおきなものでも6×7cm程度である。全体的な器形を推定できるものはすぐなく、詳細な比較はできない。しかし、トロナドーラ土器とラ・ピニヤタ土器の両方を実見した筆者の印象では、上記の赤色帯、刻線、刺突文、貝殻圧痕などの装飾はたしかに似ている。浅く幅のひろい刻線は両者に共通しており、おなじような施文具がつかわれたと推定される。

ラ・ピニヤタ土器にはつぎのゾーンド・バイクローム期(500BC-AD500)への連続をしめすものがあつたことから、ティスカバ土器はラ・ピニヤタ土器以前のものとされ2000BC以前という年代があたえられた³⁾。

試掘坑は4×4mで発掘面積がちいさく、遺構、あるいはこの時代の生業体系を復元するための資料となるような植物依存体や遺物はまったくえられていない。

(3)ディナルテ土器

じつは、ニカラグアで形成期の土器が出土したという報告は以前からあつた。ニカラグア湖にうかぶオメテペ島のロス・アンヘレス遺跡で1962年に発掘をおこなつたハバーランドは、2×3mの試掘坑2つから紀元前2千年紀にさかのぼる可能性のある土器を発見した[Haberland 1966]。これらの試掘坑ではゾーンド・バイクローム土器(区画文二色土器: 500BC-AD500)の出土する層の下に砂利の無遺物層があらわれ、さらにその下の層から100点たらずの土器片が採集されたのである。サンプル数もすくなく、破片もちいさいものばかりであるため、これらの土器の全体像を復元することは困難であった。しかし、ゾーンド・バイクローム土器をふくむ層とは無遺物層によってへだてられた下層から出土したことから、ハバーランドはこれを最古の土器であると断定した。ディナルテ土器(正確にはディナルテ期の土器というべきかもしれないが、本稿ではこの用語をもちいる)となづけられたこの土器の特徴は以下のとおりである。

1. 表面調整: 外面がわずかに磨かれ、内面は粗く、灰色をしている。
2. 器形: わずかに数点の口縁部破片がある。ひとつは、胴部が球形で、肩がはり、口縁がわずかにたちあがつた壺である。もうひとつはやはり球形の壺だが口縁がふくらんでいる。これらの他には、円筒容器の底とおもわれるもの、瓶型土器の口の部分とおもわれるものがあり、いずれも器壁がぶあつい。
3. 装飾: 土器片は大部分が無文であるが、文様をもつ破片も何点かある(図4)。上記の口縁部破片は、赤の彩色がほどこされているほか、刺突文をもつ破片もある。

土器にともなうその他の遺物や遺構は報告されていない。C14年代測定値もなく、他地域で報告されていたものに明確な関連性を指摘できる土器もなかつた。しかし、層位的にみるとふるいことが確実であった。パナマのモナグリーヨ土器(2900-1300BC)との漠然とした類似から、ハバーランドはこの土器の年代を1500BC頃とした。

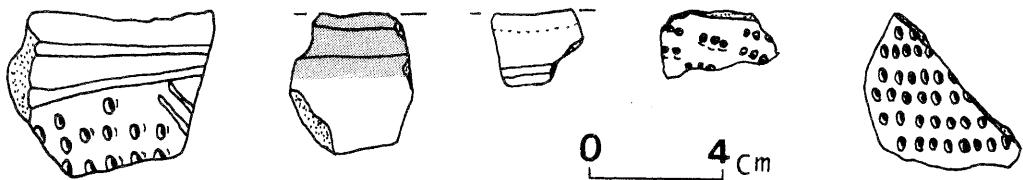


図5 ディナルテ土器(Haberland 1966 写真より作成)

ハバーランドがこの土器を報告したときには、資料数のすくなさからか、あまり注目されず、年代にかんしても疑問視されていたようである。その後トロナドーラ・ビエハ遺跡が大規模に発掘されて、地理的にもちかいコスタリカ北部で紀元前2千年紀の土器の存在が証明され、その形態があきらかになった。つづいて、これも比較的近距離にあるマナグアのビジャ・ティスカパ遺跡でもおなじような土器が発見された。ディナルテ土器は、トロナドーラ土器やラ・ピニャタ土器(ビジャ・ティスカパ遺跡)といいくつかの共通点をもつ。現在ではディナルテ土器もやはり紀元前2千年紀の土器であるとかんがえられている。年代決定の根拠のひとつとされたモナグリーヨ土器との類似はともかく、ハバーランドの報告から20年以上を経て、彼の年代観が正しかったことは証明されたのである。ハバーランドはいくぶんひかえめに年代をみつもって1500BCとした。しかし、トロナドーラ土器の製作開始が2000BCであるならば、オメテペ島よりもとおくのマナグア(ビジャ・ティスカパ遺跡)にまでトロナドーラとおなじような土器がひろがっている状況を考慮して、ディナルテ土器の開始年代を2000BCまで引きあげることに問題はないであろう。

(4)コスタリカとニカラグアにおける形成期の土器の発見の意味

トロナドーラ土器の発見はきわめて重要な意味をもっていた。それはトロナドーラ・ビエハ遺跡の地理的位置である。上にあげたコウ、レイスラップなどの、「核アメリカと中間領域の形成期文化は単一の伝統から派生したものである」という伝播論のひとつの根拠は、この広大な領域における紀元前2-3千年紀あるいはそれ以前の土器が相互に類似しているという点であった。トロナドーラ・ビエハの発掘調査以前の状況は概観すると以下のようなものであった。

南からみてゆくとペルーではパンダンチエの土器が2000BCから(Kaulicke 1975、C14年代についてはBurger 1992:232を参照)、エクアドルではガヤス・マナビ地方のバルディビア土器が3300-1500BC [Meggars et al. 1965; Damp 1984] とされる。コロンビア北部のカリブ海岸にはプエルト・オルミーガに代表されるいくつかの遺跡で4000-2200BC [Reichel-Dolmatoff 1965; Oyuela 1987] とされる土器が出土しており、おくれてバルロベント遺跡などの土器が2200-1000BCとされる[Reichel-Dolmatoff 1965]。パナマ中部のパリタ湾岸のモナグリーヨ土器は2900-1300BC [Cooke 1984] とされた。

従来の状況ではこのパナマ中部のモナグリーヨ遺跡以北では、2000BCにちかいか、それをさかのぼる可能性がある土器としては、メキシコのテワカン谷のプロン期の土器 [MacNeish et al. 1970] とチアパス・グアテマラ南部太平洋岸のバラ・オコス期の土器 [Green and Lowe 1967] があげられていた(現在では、これらの土器の年代はかなりくだるとされている)。しかしパナマ以北の地峡地帯(コス

タリカ、ニカラグア、エル・サルバドル、ホンジュラス)は空白地帯だったのである。もしも、各地域の形成期の土器がいずれかの場所からの伝播によってひろがったと仮定するならば、コスタリカ・ニカラグアであたらしく発見された形成期の土器は、このミッシング・リンクに相当するものであり、当然パナマ・コロンビアの土器とメキシコ・グアテマラの土器の中間的な形態をとらなければならない。

ところが、トロナドーラ・ビエハ遺跡の発掘に参加し、土器を分析したフープス [Hoopes 1992] によると、トロナドーラ前期の土器は、北のものとも、南のものとも明確な関係がみとめられないという。さらに彼は中間領域全体の形成期の土器を詳細に検討した結果、従来は相互に「似ている」とされたこれらの土器が共有するのは、テコマテ形の器形、赤の彩色、刺突文など、表面的でおおまかに特徴のみであると主張する。フープスによれば、中間領域と核アメリカの形成期の土器は各地で独自に発達した土器製作伝統によるものであるとされる。

もうひとつ重要なことは、トロナドーラ・ビエハ遺跡が標高540mの山岳地帯の湖畔に立地することである。中間領域のコロンビア、パナマ、エクアドルの形成期の土器が出土する遺跡はいずれも海岸の貝塚であり、さらにチアパス・グアテマラの遺跡も海岸にあった。これにたいして、トロナドーラ・ビエハはまったくことなった山地の淡水湖のほとりという生態環境にあり、上述のように初期農耕の痕跡がみられる。また1970年代以降モナグリーヨ遺跡の周辺をしらべた結果、海岸線から18-25km内陸にはいった岩陰や洞窟遺跡からも動物骨と共にモナグリーヨ土器が出土した [Cooke 1984: 268-281]。それらの内陸遺跡では、海産物は食料として重要性をもたなかつたとかんがえられている。

モナグリーヨの海岸貝塚と内陸の洞窟・岩陰が同一集団の季節的移動を反映しているのか、ことなった集団によることなった環境への適応をしめしているのかは不明である。いずれにせよ「中間領域では古い時代の土器はからず海岸から出土する」という図式は崩された。そして、さらにトロナドーラ土器の発見により形成期の中間領域の各地の社会の生業の多様性があきらかにされた。土器製作伝統の多様性・独自性とともに、このことは中央アメリカ南部(よりひろくは中間領域)の各地の社会が自立的に並行して発展したという議論をいっさに加速させるものであった。

5. 1980年代以降の調査成果2：パナマ中部の農耕村落遺跡

前章でみた中央アメリカ南部における土器の製作開始につづいて、その後の農耕の発達と定住村落の成立について、この章でパナマ中部の事例を紹介する。

(1)イションによるトノシ谷の発掘成果

イションはパナマ中部のアスレロ半島南端のトノシ谷(図6、以下パナマ・コロンビアの遺跡についてはこの図を参照)で遺跡の分布調査と試掘をおこない、この地における先コロンブス期の歴史の概要をあきらかにした [Ichon 1980]。

ブカロ期とされる最初の居住は開始年代不明でAD200までつづく。ブカロ期の居住はトノシ川下流域の1遺跡、河口の1遺跡、そしてグアニコ川の河口から3km南西の海岸の1遺跡で、計3遺跡でみられる。出土遺物は刻線文土器と粗末な石器で、農耕の痕跡はない。ブカロ期の居住に関連する

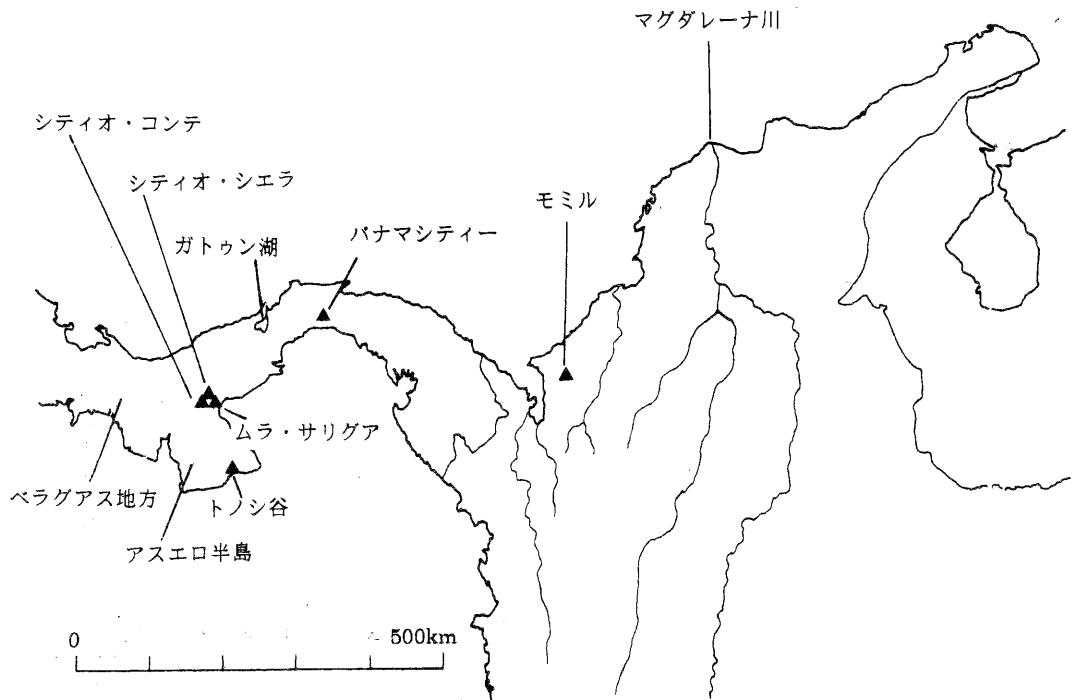


図6 パナマ・コロンビアの遺跡

C14年代としてAD20±110がえられている。

ブカラ期のつぎのエル・インディオ期の居住の痕跡は13遺跡で確認されている。うち3遺跡は前時代からの居住が連続しており、10遺跡であらたに居住がはじまっている。遺跡数が4倍にもなっており、きわだった人口増加が予想される。エル・インディオ期の土器はトノシ土器とよばれてる。白地に黒の二色土器、あるいは黒と赤の多彩色土器で、文様のモチーフは幾何学文、人物描写などで、きわめて高度な芸術性がみられる(図7)。石器としてはマノ・メタテがあらわれ、農業生産の開始が示唆される。金属製品も出土する。そしてこれら工芸品を副葬品としてともなう埋葬もみつかっている。エル・インディオ期のC14年代としてはAD390±100とAD450±100がある。この時期のトノシ土器と同型式の土器はおなじくパナマ中部のコクレ地方、ベラグアス地方の遺跡でも出土する。イションは上記のふたつのC14年代とコクレ地方、ベラグアス地方でトノシ土器を出土する遺跡にあたえられた年代を加味して、エル・インディオ期をAD200-500とし、AD400前後を最盛期とした。

(2)ムラ・サリグア遺跡の発掘調査

カリタ湾岸では、1000BC頃まではモナグリーヨ土器を出土していた海岸・内陸の遺跡は放棄されたようである。この時期から海岸平野に農耕村落が出現する紀元前後までは、従来資料がなく空白期間であったが、クックらのおこなったサンタ・マリア考古学プロジェクトによって、この間の推移があきらかになった [Cooke and Ranere 1992: 274-284]。

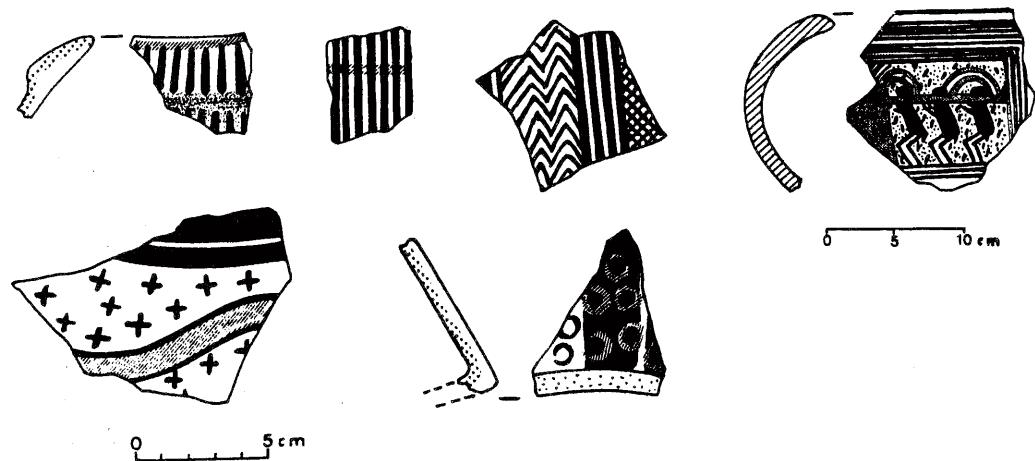


図7 トノシ谷出土、エル・インディオ期の彩色土器(Ichon 1980: Figs.39, 41)

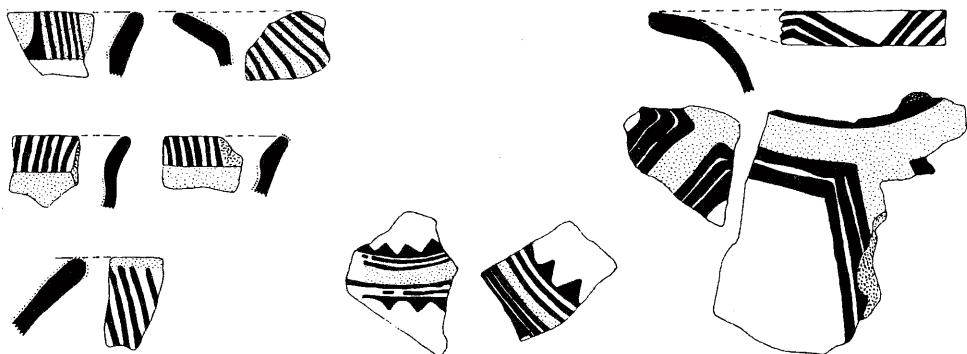


図8 ムラ・サリグア遺跡出土彩色土器 (Cooke and Renere 1992 Fig.9)

ムラ・サリグア遺跡の発掘資料を中心に彩色土器の編年を試みたイササ [Isaza 1993]によると、ムラ・サリグア遺跡の小規模な生活遺物廃棄跡から出土した土器のなかには、モナグリーヨからの連続をしめしつつ、テコマテ形から有頸壺への推移をうかがわせるものがあり、C14年代は920-630BCである。また、この土器にはモナグリーヨ以来の刻線文様にくわえて彩色がみられるという。彩色のみの土器(図8)は二色のものも多彩色のものも900BCごろからあらわれはじめ、530-60BCに数のうえでは最盛期をむかえる。

ムラ・サリグア遺跡は390BCごろから急激に拡大することが確かめられている。クックによると、390-240BCの150年間で面積が8.5haから58ha、およそ7倍に増加しており、人口も570-700人であったと推定されている。この時期、パナマ中部ではうたがいようのないトウモロコシ農耕の証拠があらわれ、海岸付近の平野部に定住農耕村落がいとなまれる。パナマ中部の土器はパナマ・シティー周辺

の遺跡やカリブ海岸地方にも分布しており、このことから300BC頃、同一の土器製作技法をもつトウモロコシ農耕民がパナマ中部から東部にかけて急速に居住を拡大したとかんがえられる。

おなじくパリタ湾岸にあり、サンタ・マリア川の氾濫原に位置するシティオ・シエラ遺跡は、ムラ・サリグア遺跡よりも規模ははるかにちいさいが、いくつかの住居跡が発掘されている [Cooke 1984: 284-286]。この遺跡では240-25BCまでにはモナグリーヨ土器を出土する遺跡とはあきらかにことなる農耕定住村落の様相があらわれるという。3つの住居の床面が確認されており、65BC±80～AD235±90までの4つのC14年代測定値がえられている。これらの住居跡の床面にはこの時代の生活を推測できるおおくの遺物がのこされていた。足つきのメタテと円筒形のマノはトウモロコシ調理具であり、多量の炭化したトウモロコシも発見されている。このほかには長方形のナイフ形石器、砥石、磨製石斧を修理したさいの剥片が出土している。床面下からは集団埋葬墓が発見されており、25体の人骨が確認された。副葬品には実用品の彩色土器、石器製作のための道具がある。トウモロコシの炭化物もこの埋葬から出土している。副葬品のうち、生活用具ではないものは貝と黄鉄鉱製の首飾りだけである。この集団墓は継続的にもちいられ追葬がおこなわれていた。最古の埋葬のC14年代測定値のみえられており、240BC±80である。

以上のデータから300BC-AD400のパリタ湾岸のトウモロコシ農耕民の社会の様相がおおまかに把握された。人々は海岸平野、河川の流域に掘建て柱式の住居をつくって定住農耕村落をいとなんっていた。最大の集落ムラ・サリグアでは人口600人あまりであり、シティオ・シエラにみられるように住居の規模は4×8mほどであった。祭祀センターの類はいまのところ発見されていない。死者は住居の床下に葬られ、おそらくは生前もちいていた日用品が副葬された。日用生活品以外の副葬品がほとんどみられないことは、階層分化が未発達であったことのあらわれかもしれない。

ところで、AD500ごろまでには、パリタ湾沿岸では明確な階層社会の証拠をみることができる。1930-33年にリオ・グランデ・デ・コクレ川流域のシティオ・コンテ遺跡を発掘したロスロップはコンテ多彩色土器、石製装飾品、金製品を大量に副葬された埋葬を発見した [Lothrop 1937, 1942]。当時はこの遺跡の年代ははっきりしなかったが、近年になりその時代的な変遷をたどれるようになった [Bray 1992: 34, Table 3.1]。これによると、シティオ・コンテにはAD400からスペイン人の侵入まで居住がつづいており、ロスロップが発掘した埋葬はAD400-900のものであった。最古の埋葬は埋葬1と32であり、AD400-500という年代があたえられている。この段階になると、豪華な副葬品をともなう埋葬から、あきらかな階級分化をみてとれる。

(3) パナマ中部における農耕村落と階層化社会の起源

うえに紹介したトノシ谷における調査結果から、イション [Ichon 1980] はパナマ中部における農耕村落の発展について、つぎのような図式を描いていた。太平洋に突きでたアスエロ半島の先端の海岸にAD200ごろ、おそらく海路エクアドルから到来した人々がいた。彼らがこの地に、トウモロコシ栽培、多彩色土器の製作、金製品をもたらした。やがて、トウモロコシの栽培をおこなう定住農耕村落という生活形態と彩色土器・金製品はパリタ湾岸やベラグアスなどの隣接地域へとつたわってゆく。パリタ湾岸のシティオ・コンテの埋葬からわかるように、AD500までにはこの地に階層化した社会が成立していた。

これにたいしてクックとラネーレ [Cooke and Ranere 1992] は、つぎのように反論する。まず、パ

ナマ運河のガトゥン湖のボーリングコアをみると1150BC-AD150には、すでにトウモロコシの植物化石があらわれている¹⁾。トウモロコシはAD200になって南から「逆流」してきたのではなく、もともとパナマで栽培されていたのである。上記イササ [Isaza 1993] の研究によれば、パリタ湾岸のムラ・サリグア遺跡の870-650BCの土器にはトノシ谷のAD200-500の彩色土器(彩色土器)の原型はすでにあらわれている。そして、その土器は形成期のモナグリーヨ土器からの連続的な発展の結果である。よって、トウモロコシ栽培、定住農耕村落という生活形態、彩色土器は南アメリカからの移住者によってもたらされたものではない。あくまでもパナマのパリタ湾岸の形成期からの在地発展による結果であると主張する。

それではAD500年ごろまでにはこの地でおこっていたとかんがえられる階層化社会の成立についてはどうであろうか。これを端的にあらわしているのはシティオ・コンテにみられる支配者階級の威信財・副葬品としての金製品である。エリート階級の発生と金製品の導入のあいだの因果関係がいかなるものかはひとまずおくにしても、AD400頃までにはパナマ中部の人々が金製品を「価値あるもの」としていたことはたしかである。従来これらの金製品は、あきらかに南アメリカ大陸からもたらされたものであり、コロンビアのシヌー川流域やウラバ湾がその起源であるとされてきた。しかし、クックはこれら金製品すらもパリタ湾沿岸で独自に製作された可能性があるという。その根拠は、金製品のモチーフにシティオ・コンテ遺跡に特徴的なコンテ・ポリクロームに描かれているヘビやその他のパナマ中部の多彩色土器にひんぱんにあらわれる「羽をひろげたワシ」と類似したものがあるということである [Cooke 1984: 291-292]。

ここにも従来の伝播論的なみかたから在地発展論的なみかたへのおおきな転換を見ることができる。イションが、パナマ中部における定住農耕村落の成立とその拡散の起源を南アメリカ(エクアドル)からの移住者に帰したのにたいして、クックらはこれを外部からの移住者や刺激によるものではなくパリタ湾岸の形成期社会からの連続的な発展とみなしている。金製品の出土という事実から一見あきらかなようにみえるコロンビアとの関係についても否定的なのである。

6. 中央アメリカ南部の考古学の現状

1980年のSARのセミナーから7年後に、ダンバートン・オーカスで、「中間領域の富とヒエラルキー」と題されたシンポジウムがおこなわれた。1980年のSARセミナーの参加者のほとんどはこのシンポジウムにも再度参加している。しかし、1992年に出版されたこのシンポジウムの成果をまとめた論集 [Lange 1992a] をみると、1980年のものとくらべてストーンとハバーランドが寄稿していないのが目につき、世代交代がうかがえる。

さて、1980年のセミナーがもともとは「全体的な見とおし」をつくることを目的としていたのにたいして、1987年のシンポジウムの論集を読むかぎり、寄稿者たちのおもな関心は、「中間領域各地の居住と社会階層化、そしてその背後にある生業体系の展開」であるようにおもわれる。つまり、興味の対象は「文化」よりも「社会と自然環境」へとむかっていった。結果として、近年では発掘で出土した植物遺存体や動物遺存体を同定し、動物や魚や貝や植物の種名を延々とならべたてる論文もふえている。その一方で、土器の編年をみなおしたり、その地域にはもともとみられない特徴的な遺物の系譜を他地域に追いもとめるという作業はかえりみられなくなった。中央アメリカ南部をふくむ中間領域の研究者のおもな関心は「全体的なみとおしをたてる」ということから「多様性こそが中間領

域の特徴であり、そのような多様な文化をうみだした生態学的な要因をさぐる」という方向にうつつていったのである。

7. 考察

筆者はけっしてかつての伝播論を復興させよとするものではないが、近年の在地発展論のたかまりには反発をかんじている。反発をかんじる学問的なレベルでの理由は次章で詳述する。もうひとつの感情的なレベルでの理由は、長期にわたるフィールドワークに従事し調査地の社会にふかくコミットメントした考古学者たちが、それぞれの国のナショナリズムに迎合しているとかんじられるからである。自身のなかにふくまれるそのようなバイアスを意識していることは明言したうえで、ここでは上に紹介した在地発展論的な考古学資料の解釈を批判的に再検討してみたい。

(1) 中間領域と核アメリカの形成期の土器

上に紹介した「形成期の土器」についてみてみる。くりかえすが、フープスの主張はひとことでいえば「紀元前2-3千年紀の中間領域と核アメリカの各地の土器はおおまかな類似性しかもたず、单一の土器製作伝統から派生しているとはかんがえられない」ということである。フープスも伝播というもの自体をまったく否定しているのではないが、伝播があったとするならば、それは粘土を焼いて容器をつくるというアイデアの伝播であり、3000BCよりはるか以前におこったものであろうとする。つまり、紀元前3-2千年紀の土器は、「形成期」の土器ではなくて「地方発展期」の土器であるという。アマゾン川下流域の貝塚遺跡の土器では、出土層位のC14年代測定値が5000BCまでさかのぼるものも報告されており [Roosevelt 1995]、フープスの説を補強する材料ともなりえる。

しかし、各地の土器はほんとうに「似ていない」のだろうか。トロナドーラ土器が北のものとも南のものとも「似ていない」と主張するフープスの論考を注意ぶかく読みかえしても、相違点がなにかということはのべられていない。フープスの記述を引用する [Hoopes 1992: 70]。「刻線、貝殻圧痕、ロックアスタンピング、内湾する口縁の碗という点では、トロナドーラ土器は、バルロベント、モナグリーヨとおおまかな類似性をしめす。にもかかわらず、コスタリカの土器とコロンビア・パナマの土器は相互に非常にことなっている」。「チアパス・グアテマラの土器は、南アメリカの土器複合にくらべれば(トロナドーラ土器に)いくぶん類似しているが、比較によつては類似点とおなじくらいおくの相違点があきらかになる」。

土器分析者にとって、複数の土器のあいだに認知できる差異を言語化することは、それらのあいだの類似を指摘するよりもむずかしい。また、筆者も膨大な量の土器片を分類するという作業に従事したことがあり、土器の分類基準には言語化しがたい「なにか」があることは直感できる。各地の土器を「実見」してえられた結論であるフープスの主張を簡単に否定するつもりはない。しかし「似ていない」から関連性がない、製作技術が伝播したものではないと主張するためには、そこになんらかの基準をもうけなければ、「類似点よりも相違点を強調しているだけ」という批判をしりぞけられるだろうか。

言語化しがたい「なにか」によって土器を分類することができ、「似ている」から関連性があると主張できるのならば、筆者はマナグアの出土のラ・ピニャタ土器とトロナドーラ土器のあいだには関連性があるとするエスピノサの主張 [Espinoza 1995]を支持する。上述のとおり筆者も双方の土器を実

見している。これに、オメテペ島のディナルテ土器をあわせれば、コスタリカ北部からマナグア湖畔にかけて(両者のあいだは直線距離にして約250km)おなじ伝統を共有するとおもわれる土器が分布している。しかもそれらは淡水湖の湖畔かそのなかの島という類似した生態環境下の遺跡から出土している。フープスが前述の論考を発表したときには、ラ・ピニヤタ土器は発見されていなかったことからか、彼の議論には、1遺跡をこえて、おなじ土器がどのていどの範囲までひろがっているかという視点がとぼしいようにおもわれる。そのような視点をもつ議論としては、マイヤーズが「相互交流圏(Interaction Sphere)」という概念を提唱している [Myers 1978]。相互交流圏とは「中間領域の両端のふたつの文明を結びつけた一連の文化の円」とされる。それぞれの円はいくつもの要素を選択的に通過させるフィルターなので、全体が均質な文化圏になることはなく、隣接しているものどうしがもっともおおくの要素を共有し、両端のものは共通性がすくなくなる。

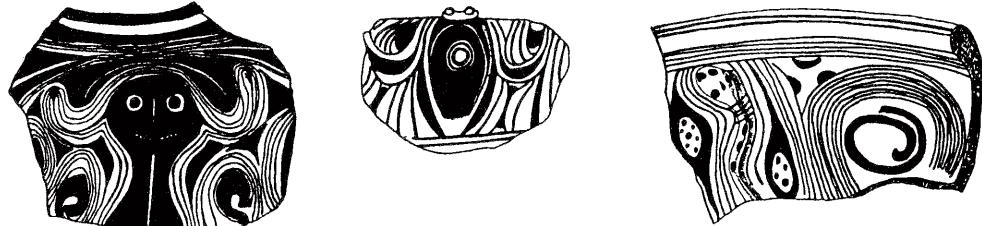
筆者には、マイヤーズの論が現実の考古学データをもっともよく説明しているようにおもえる。フープス自身も「相互交流圏」概念の有効性をみとめながらも [Hoopes 1992: 48]、彼の議論はその方向にはむかっていないのである。

(2)パナマ中部の定住農耕村落

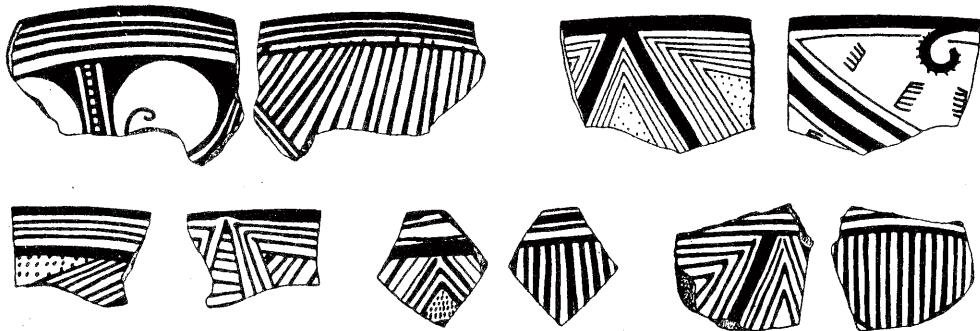
パナマ中部における農耕村落と階層化社会の起源という問題についてはどのようなことがいえるだろうか。クックらの提示した発掘の成果によって、イションの南アメリカからの伝播という説は完全に否定されたかにみえる。しかしここで在地発展説の論拠をもういちど検討してみたい。

まず、クックらの「パナマにおけるトウモロコシ栽培は紀元前にさかのぼる」という説である。この根拠はガトゥン湖でえられたボーリングコアのなかにふくまれていたトウモロコシの植物化石である。トウモロコシの植物化石は計23個検出された。深さ49.37m(5050BC)からひとつと深さ7.92-0.91mの堆積(1150BC-AD150)から22個検出されたという。5050BCという年代については、考古学上の常識から逸している。クックらもこの年代については論拠としてはいない。7.92-0.91mの堆積(1150BC-AD150)については、筆者がバートレットの報告 [Bartlett et.al. 1969] を読むかぎり、これが意味するところはトウモロコシは1150BCに栽培がはじまっていたということではなく、1150BC-AD150のある時点で出現することだけであるとかんがえられる。バードはアメリカ大陸各地から出土したトウモロコシの遺存体の形態比較をおこなっている。その結果は、シティオ・シェラのトウモロコシは穂軸の幅、粒の数その他の形態的な特徴においてモチエのものとの類似がみられるという [Bird 1984: 57]。トウモロコシがメキシコから南下して南アメリカにつたわったのはかなりはやい時期であり、南アメリカで品種改良されたものが北へと「逆流」するという現象があったのではないかという説は、上記のバードをはじめ何人かの研究者によってとなえられている⁵⁾。この点、シティオ・シェラのトウモロコシが形態的には南アメリカで品種改良されたものにちかいという事実には注目すべきである。この問題についてクックらはパナマにおける紀元前のトウモロコシの資料数の増加をまたなければならないとして結論を保留する。

ところで、以前ライヘル・ドルマトフは、彩色土器はベネズエラからコロンビアを経て地峡地帯にひろまったと主張した [Reichel-Dolmatoff 1965]。イションも一度はベネズエラからの伝播の可能性を検討したようであるが、パリタ湾岸よりもさきにトノシ谷に彩色土器があらわれるという立場をとったことから、太平洋に突出するアスエロ半島南端のトノシ谷に最初に到達するには太平洋岸の海路によるエクアドルからの伝播をかんがえるしかないと結論づけたようである。ところが実際は



トクーヨ（ベネズエラ・マラカイボ湖西岸）出土彩色土器



カラチエ（ベネズエラ湾岸）出土の彩色土器

図9 ベネズエラ出土彩色土器 (Kidder 1994 Fig.49)

カリタ湾岸のほうが彩色土器の製作開始時期ではトノシ谷に先行していることがクックらの調査であきらかになった。

ムラ・サリグアの土器(図8)とベネズエラの土器（ベネズエラ湾岸のカラチエ、マラカイボ湖西岸のトクーヨ：図9、Kidder 1944）を比べてみると、いくつかの類似点があることがわかる。黒あるいは赤をもちいて、曲線・直線の平行線を描く技法、器形も口縁の開く大型の有頸壺、やや口縁がすぼまる半球状の碗は共通している。イササがモナグリーヨ土器からムラ・サリグアの彩色土器への移行形態にみられるとする左右対称性への志向もすでにベネズエラの土器には明確にあらわれている。イササが900-500BCの年代をあたえるムラ・サリグアの彩色土器と1000BCにはじまるとされるベネズエラ湾岸の彩色土器とのあいだに共通点をあげることは可能なのである。

南アメリカから地峡地帯(中央アメリカ南部)への彩色土器やトウモロコシの伝播を想定する場合つねに問題となるのが、コロンビア北部のシヌー川下流域にあり地峡地帯への入り口にちかいモミル遺跡のデータである。モミル遺跡では彩色土器の出現は200BC、トウモロコシの出現は紀元前後とされる [Reichel-Dolmatoff 1965]。つまりクックらにいわせれば、パナマ中部よりもおくれて出現することになる。しかし、モミルをはじめコロンビア北部では、彩色土器とトウモロコシの出現は南アメリカ全体のなかでは例外的におそいようにもみえる。南アメリカではエクアドルのベガス期にすでにトウモロコシが出土するよう長い品種改良の歴史があった。コロンビアでもっともふるいトウモロコシの痕跡がマグダレーナ川上流域にあられるのは1300BCで、800BCにはオリノコ川下流域にたっしている [Bray 1984: 317-319]。また、上述のように彩色土器も1000BC頃ベネズエラ湾では

製作されていた。

筆者には、中央アメリカと南アメリカの交流についての議論において、陸路と太平洋岸沿岸航路(Coe 1960; Hosler 1988など)にくらべ、カリブ海沿岸航路の重要性がみすごされているようおもえてならない。コロンビア北部をバイパスして海路ベネズエラからパナマ中部へと彩色土器やトウモロコシがもたらされた可能性も検討すべきではないかとかんがえる。コロンビアと国境を接するパナマ東部のダリエン地方は現在なお交通の難所でありつづけている。

かつて伝播論が批判されたひとつの理由は、ある一点からの文化要素の拡散という先見的な図式にのっとって考古学資料を解釈しようとしたことである。しかし、クックらの議論をみると、在地発展論においてもおなじようなことがおこっているのではないかと危惧されるのである。パナマにおけるトウモロコシの出現年代については可能性のある年代の最古のもの(1150BC)を採用してパナマ独自の品種改良を主張し、AD500ごろの金製品については、在地の土器におなじようなモチーフがあるという理由で、元素組成の分析による生産地同定もなされないままパナマで独自につくられたものがあるとしているのである。

8. むすびにかえて

最初に紹介した、サンダースとマリーノの「なぜ中間領域に国家がなかったのか」という問い合わせは、「部族→首長国→国家」というサーヴィス流の進化論的なみかたから発せられたものであった。上にみてきた流れのなかから、現在では、この問い合わせは「中間領域では、いかにして国家形成をなさずに、多様性にもとづく適応システムのうちに安定した社会を維持できたのか」という問い合わせにかわってきた。いいかえれば、中間領域の諸文化がそれら自身の社会的、宗教的、政治・経済的、環境的いろいろな条件のなかで達成したものを重視するみかたであり、歴史個別主義的あるいは文化相対主義的なみかたといえる。このような傾向は、まったく正当なものであろうが、ゆきすぎると問題がないわけではない。以下、近年の「在地発展説」のキーワードである、「独自性」、「多様性」について若干かんがえてみたい。

(1)「独自性」について

たしかに中央アメリカ南部には、メソアメリカや中央アンデスのように広大な領域にひろがる汎地域的な物質文化のパターンがみられない。しかし、このことをもって中央アメリカ南部の各地域が、隣接する地域や、ひいてはメソアメリカ、南アメリカの「影響」をまったくうけずに自給自足的な社会をいとなんていふるのは非現実的なかんがえである。もちろん、在地発展を強調する研究者たちも地域間交流をまったく否定しているわけではない。しかし、その評価となると消極的であり、地域間交流が各地の社会にはたした役割を過小評価しているきらいがある。この背景には以下にのべる3つの要因をみてとることができる。まず、かつて主流を占めていた、中央アメリカ南部あるいは中間領域全体の社会発展をメソアメリカや南アメリカからの影響で説明する伝播論的学説にたいする反動である。次に、生態環境とそれへの適応による社会発展を重視するプロセス考古学において、ある地域をひとつの閉じた世界として想定する必要があったこと。最後に、中央アメリカ南部が現在おおくのちいさな国にわかれており、しかも1970年代から80年代にかけて政治的に不安定だったために研究交流が困難であったことである。しかし、内的発展ばかりに注目して、外部からの影響をみすごすと、中央アメリカ南部の先スペイン期の歴史像が断片化してしまうのではな

いかとおもわれる。

(2)「多様性」について

中央アメリカ南部あるいは中間領域の文化が多様であることは否定しえない事実である。この「多様性」を説明するときにひんぱんにもちいられるのが、ことなった環境へ適応という生態学的な説明である。文化を人間の身体外適応手段とみると、多様な環境のもとでは多様な文化が生まれるとする説明は説得力をもつようにもおもわれる。しかし、メソアメリカや中央アンデスとくらべたとき、中央アメリカ南部あるいは中間領域の自然環境が多様であるとはとてもいえない。そして、環境がより多様であるメソアメリカや中央アンデスでは、均質な文化が広大な地域にひろがるという現象がしばしばおこっていたのである。

「独自性=多様性」と「外部からの影響=均質性」は、ひとつの文化のふたつの側面であり、かならずしも二項対立的にかんがえるべきものではない。今後中央アメリカ南部の考古学のデータベースが充実してゆけば、中央アメリカ南部各地の社会がたどった発展のプロセスのなかでこれらふたつの要因がどのように働いているかがあきらかになるであろう。

注

- 1) じつはこうすると、ホンジュラス中南部、エル・サルバドル東部、ニカラグア太平洋岸、コスタリカ北西部が、キルヒホフが設定したメソアメリカと重複してしまう。筆者は、これらの地域にメソアメリカ的な文化要素が顕著になるのは、10世紀にはじまる北方からの民族移動によるものであるとかんがえている [長谷川 1999]。
- 2) 報告書[Espinoza 1995]には出土状況は詳述されていない。調査者によるとティスカパ土器とラ・ピニヤタ土器と層位的に分離できたわけではない(エスピノサからの私信)。
- 3) しかしながら、ティスカパ土器はサンプル数もすくなく、小破片のみであり型式的にもラ・ピニヤタ土器と明確にわけられるかどうかはうたがわしい。両者は層位的に分離できたわけでもない。トロナドーラ土器と似ているものをラ・ピニヤタ土器、それ以外のものをティスカパ土器として年代差を設定するというやりかたは根拠がとぼしい感がある。
- 4) トウモロコシ栽培の開始年代が古いとするクックらのもうひとつの論拠としては、モナグリーヨ土器を出土する洞窟遺跡からトウモロコシの植物化石がえられているという事実がある。しかし、先土器時代(古期)からの人間活動の証拠があるそれらの洞窟の遺物包含層は非常にうすく(場所によっては25cmの堆積が3500年の時間幅に相当)、分層発掘がきわめてむずかしかったことは、調査者らもみとめるところである。また洞窟ではトウモロコシがあるのに、海岸のモナグリーヨ遺跡では確認されなかったとうおおきな矛盾もあり、筆者は後世の攪乱とかんがえる。
- 5) トウモロコシが南米から地峡地帯に「逆流」したという可能性をかんがえるとき、地峡地帯の言語が南米系であるという指摘も意味ぶかいものにおもわれる。ただし、現在ではチブチャ系の言語の分岐がおこったのは3000-2000BCといったかなりはやい時期であるとかんがえられている [Fonseca y Cooke 1993: 219]。

参考文献

- Bartlett, A., E. Barghoon, and R. Berger
 1969 Fossil Maize from Panama. *Science* 165: 389-390.
- Baudez, C.
 1970 *Central America*. trans. J. Hogarth. Nagel Publishers, Geneva.
- Bird, R.
 1984 South American Maize in Central America? In *Pre-Colombian Plant Migration*, D. Stone ed.: 39-65. Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 76.
- Bradley, J.
 1994 Tronadora Vieja: An Archaic and Early Formative Site in the Arenal Region. In *Archaeology, Volcanism and Remote Sensing in the Arenal Region, Costa Rica*, P. Sheets and B. McKee eds.: 73-86. The University of Texas Press.
- Bray, W.
 1984 Across the Darien Gap. In *Archaeology of Lower Central America*, F. Lange and D. Stone, eds.: 305-338. The School of American Research.
- 1992 Sitio Conte Metalwork in Its Pan-American Context. In *River of the Gold, Precolumbian Treasures from Sitio Conte*, P. Hearne and R. J. Sharer eds.: 32-47. University Museum, University of Pennsylvania.
- Burger, R.
 1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. Thames and Hudson.
- Coe, M.
 1960 Archaeological Linkages with North and South America at La Victoria, Guatemala. *American Anthropologist* 62: 363-393.
- Cooke, R.
 1984 Archaeological Research in Central and Eastern Panama: A Review of Some Problem. In *Archaeology of Lower Central America*, F. Lange and D. Stone eds.: 263-302. The School of American Research.
- Cooke, R. and A. Ranere
 1992 The Origins of Wealth and Hierarchy in the Central Region of Panama(12000-2000BP), with Observations on Its Relevance to the History and Phylogeny of Chibchan-Speaking People in Panama and Elsewhere. In *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area*, F. Lange ed.: 243-316. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Damp, J.
 1984 Architecture of the Early Valdivia Village. *American Antiquity* 49: 573-585.
- Espinoza, E.
 1995 La Cerámica Temprana de Managua y Sus Vínculos Regionales. In *Descubriendo las huellas de nuestro antepasado; El Proyecto "Arqueología de la Zona Metropolitana de Managua"*, F. Lange

- ed.: 17-24. Instituto Nicaraguense de Cultura.
- Fonseca, O. y R. Cooke
- 1993 El sur de América Central: Contribución al estudio de la región histórica Chibcha. En *Historia General de Centro América*. Tomo I , R. Carmack, editor. Comunidades Europeas: Sociedad Estatal Quinto Centenario: FLACSO. Madrid.
- Green, D. and G. Lowe
- 1967 *Altamira and Padre Piedra, Early Preclassic Sites in Chiapas, Mexico*. Papers of the New World Archaeological Foundation, no. 20.
- Haberland, W.
- 1966 Early Phases on Ometepe Island, Nicaragua. *Proceedings of the 36th International Congress of Americanists* I: 399-403.
- 1978 Lower Central America. In *Chronologies in New World Archaeology*, R. Taylor and C. Meighan eds.: 395-430. Academic Press.
- 長谷川悦夫
- 1999 「先コロンブス期のマナグア湖畔—チョロテガの移住にかんする諸問題」『古代アメリカ』2: 59-82、古代アメリカ研究会。
- Hoopes, J.
- 1992 Early Formative Cultures in the Intermediate Area: A Background to the Emergence of Social Complexity. In *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area*, F. Lange ed.: 43-83. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- 1994 Ceramic Analysis and Culture History in the Arenal Region. In *Archaeology, Volcanism and Remote Sensing in the Arenal Region, Costa Rica*, P. Sheets and B. McKee eds.: 158-210. The University of Texas Press.
- Hosler, D.
- 1988 Ancient Western Mexico Metallurgy: South and Central American Origins and West Mexican Transformation. *American Anthropologist* 90: 832-855.
- Ichon, A.
- 1980 *Archeologie du Sud de la Peninsule d'Azuero, Panama*. Etudes Mesoamericaines Serie 2, No.3. Mission Archeologique et Ethnologique Francaise au Mexique.
- Isaza, I.
- 1993 Desarrollo Estelístico de la Cerámica Pintada del Panamá Central con Enfasis en el Período 500a.c.-500d.c. Tesis para el título de licenciado en arqueología, Universidad Autónoma de Guadalajara, Jalisco.
- Johnson, F.
- 1948 Central American Cultures: An Introduction. In *Handbook of South American Indians* 4, J. Steward ed.: 43-68.
- Kaulicke, P.
- 1975 Pandanche. Un caso del Formativo en los Andes de Cajamarca. Seminario de Historia Rural Andina.

- UNMSM. Lima.
- Kidder, A.
- 1944 *Archaeology of Northwestern Venezuela*. Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. XXVI-No. 1.
- Lange, F. (editor)
- 1992a *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area*. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Lange, F.
- 1992b The Intermediate Area: An Introductory Overview. In *Wealth and Hierarchy in the Intermediate Area*, F. Lange ed.: 141-164. Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Lange, F. and D. Stone
- 1984 Introduction. In *Archaeology of Lower Central America*, F. Lange and D. Stone eds.: 3-12. The School of American Research.
- Lathrap, D.
- 1977 Our Father Cayman, Our Mother the Gourd: Spinden Revisited, or a Unitary Model for the Emergence of Agriculture in the New World. In *Origins of Agriculture*, C. Reed ed.: 713-752. Mouton Publishers.
- Lothrop, S.
- 1937 *Coclé: An Archaeological Study of Central Panama, Part 1*. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 8, Harvard University.
- 1942 *Coclé: An Archaeological Study of Central Panama, Part 2*. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology 8, Harvard University.
- MacNeish, R., F. Peterson, and K. Flannery
- 1970 *The Prehistory of the Tehuacán Valley, Vol.3: Ceramics*. The University of Texas Press.
- Myers, T.
- 1978 Formative Period Interaction Sphere in the Intermediate Area: Archaeology of Central America and Adjacent South America. In *Advances in Andean Archaeology*, D. J. Brown ed.: 203-234. Mouton.
- Meggars, B., C. Evans and E. Estrada
- 1965 *Early Formative Period of Coastal Ecuador: The Valdivia and Machalilla Phase*. Smithsonian Institution Contributions to Anthropology I.
- Oyuela, A.
- 1987 Dos sitios arqueológicos con desgrasante de fibra vegetal en la serranía de San Jacinto. *Boletín de Arqueología, Fundación de Investigaciones Arqueológicas Nacionales*, 2(1): 5-26. Bogotá, Colombia.
- Reichel-Dolmatoff, G.
- 1965 *Colombia*. Praeger.
- Roosvelt, A.
- 1995 Early Pottery in the Amazon: Twenty Years of Scholarly Obscurity. In *The Emergence of Pottery*:

Technology and Innovation in Ancient Society, W.Barnett and J.Hoopes, editors: 115-132.
Smithsonian Institution Press.

サンダース、マリーノ

1972 『新大陸の先史学』(大貫訳)、鹿島研究所出版会。

Stone, D.

1972 *Precolumbian Man Finds Central America*. Peabody Museum Press.